

〔書評と紹介〕

国立歴史民俗博物館編

『中世都市十三湊と安藤氏』

鈴木 登

近年日本歴史全体を北からの視点から見直そうとする動きが活発となつてゐる。一九八六年の函館に始まり、弘前・上ノ国とシンポジウムを開催した北海道・東北史研究会の活動は、その典型的なものである。国立歴史民俗博物館では、一九九一年度から「北部日本における文化交流」をテーマに東北地方北部の各地で調査を行つてきた。その一つが十三湊と福島城の両遺跡を対象とする、富山大学考古学研究室との共同調査であつた。その成果の報告と検討を目的に催されたのが、一九九三年十月二十四日の青森市での第十四回歴史博フォーラム「遺跡にさぐる北日本―中世都市十三湊と安藤氏―93市浦シンポジウム」である。本書は、このシンポジウムの記録であり、シンポジウムの副題を書名にしている。

本書の構成は次のようになつてゐる。

刊行にあつて

石井 進

開会あいさつ

高松 隆三

開会あいさつ

石井 進

第一部

中世の日本海交通

網野 善彦

十三湊・福島城の調査

千田 嘉博

古代国家と日本海・北日本

佐藤 信

日本海に見る中世の生産と流通

宇野 隆夫

第二部

安藤氏台頭以前の津軽・北海道

三浦 圭介

東アジアの国際情勢の中で

遠藤 巖

都市研究から見た十三湊の都市構造

齊藤 利男

像の尻尾はつかまえられた―北方考古学の立場から―

菊池 徹夫

上ノ国町勝山館発掘調査と関連させて

松崎 水穂

パネルディスカッション

司会 石井 進

第三部

十三湊と博多

川添 昭二

近世十三湊の成立―付説・十三津波伝承に関する一齣―

長谷川成一

十三湊の安藤氏館と塩釜津

大石 直正

十三湊の都市空間について―その立地と地割―

玉井 哲雄

あとがき

小島 道裕

本書の内容は、第一部が基調講演と報告、第二部がパネルによるコメントと討論、第三部は、当日の聴衆者の中から紙上参加の形でコメントからなつてゐる（刊行にあつて）。以下、右の三部に分けて紹介してみたい。

第一部

網野氏は、日本海側を交通不便な地域と考えている現代人の「常識」を見直すことから出発すべきであるという。こうした常識の成立はせいぜい百年以前のこと、それより以前は、日本海が最も活気に満ちた海の交通の大動脈であり、今は一見、全くの寒村に見えても、中世から近世にかけて繁栄した港町は多数ある事を指摘する。十三湊もその典型的事例だという。日本海の大動脈は、津軽の十三湊と若狭の小浜、あるいは北九州とのつながりだけでなく、はるか南の東南アジアや、朝鮮・中国とのつながりも示しており、日本列島の社会像・日本史像は、現在根本的な再検討を迫られているという。

千田氏は、発掘調査から十三湊・福島城の性格について報告している。福島城は中世の城ではなく、平安時代の末に地域の強い軍事的緊張と関連して、蝦夷の人々の一番の中心施設として築城されたと位置づける。十三湊遺跡は、土塁を境に土塁と堀で守られている北側地区と、土塁と堀の外に置かれていた南側地区に大きく二つの部分に分かれるという。このうち北側部分からは、安藤氏の館と考えられる大きな館跡が表れた。その結果、港に直接館を持つという中世都市の姿が想定できるといふ。北日本の日本海側を「日本海・北日本」と表現する佐藤氏は、この地域の古代史像の概観と福島城の歴史的位置を中心に述べる。特に後者については、十世紀後半から十一世紀にかけての大規模な遺跡であるとし、周辺地域に「防御的集落」の遺跡が分布していることから、これら集落群の中心拠点として機能したことと、大規模な城でありながら文献史料に残っていないこととあわせて、今後の日本史上の大きな課題になると

している。

遺跡の繁栄の背景には非常に高度な生産と流通のシステムが存在すると考える宇野氏は、日本海における中世生産流通の段階を、Ⅰ期（十二世紀頃～十三世紀前半）からⅤ期（十五世紀末～十六世紀中頃）に分け、これに十三湊の盛衰がどのように関わるかを論じる。Ⅰ期が十三湊の始まりであり、Ⅳ期（十五世紀初め～中頃）の最盛期を経て、Ⅴ期に衰退し、十六世紀末以後に復活し、近世の港町としての十三湊が現れるという。また中世の典型的な都市構造は、道あるいは川が軸線となり、正面には神社、それより下位に政治的中心があるといい、十三湊の都市構造も、日本の都市の歴史の中に位置づける必要があるとする。

第二部

地元青森県の埋蔵文化財を担当する三浦氏は、北海道・本州北部は、七～八世紀には「古代前期東北北部型土師器」を使用し、同じ文化圏を形成していたが、その後の律令国家の進出によって津軽海峡が北海道と分断され、九世紀に北海道では「擦文文化」と呼ばれる独自の文化が生まれたという。十世紀後半の律令体制の動揺の中で、再び一元化の動きが起り、それらを示す遺跡も発掘されている。その後津軽地方と北海道は常に一元化を目指しており、中世安藤氏の台頭の背景にも、在地勢力におけるこの「一元化の原理」があったとし、鎌倉政権の枠組みの中に組み込まれたのも、北海道を含めた北日本の在地勢力の権力者の立場を重要視されたからであるという。

遠藤氏は、王朝国家から室町幕府にかけて、北方＝蝦夷に対する政

策・位置づけを、国内からのみでなく、東アジア全体から見た国際情勢の中で歴史的に検討し、その中で安藤氏の果たした役割に言及した。教えられるところが多かったが、その一つをあげてみる。氏は結びに「蝦夷・アイヌ民族の形成と発展・変貌の問題は、日本の国家と民族を見直す必須の課題である」（一五七頁）と述べているのに関連するが、津軽海峡で共通の文化圏を分断され異民族観を一層強化された蝦夷が自らのアイデンティティをもとに固有の民族・文化を形成してゆくことと、それに対応する役割を与えられたのが平泉・十三湊・安藤氏であったこと。さらには十三世紀末の日本史上のもう一つの蒙古襲来と対決した「骨鬼国」は蝦夷島アイヌとみられ、新民族を形成したアイヌの活発な動きを伝えていること等である。

齊藤氏は、国際貿易港博多と肩を並べるような、外に開かれた繁華な都市であったとされる千田報告にみられる十三湊の復元プランに、あえていくつかの疑問を提示する。例えば十三湊は、領主の主導により整備され過ぎた町というイメージが強い。しかし、通常の中世の町の形成から考えれば、原十三湊は前潟沿いの現在の町並みにある程度オーバーラップする形で存在したことも考えられ、ここに安藤氏がきて新しい町並みをつくり十三湊の大改造を行ったと見られないかとし、この鍵を握るのが中軸街路の建設の時期であろうという。

菊池氏は、福島城が防衛集落という性格だとすれば、十ないし十一世紀の時期に何のための防衛かという問題や、十三湊については、南赤坂遺跡（新潟県巻町）からオホーツク式土器と思われる遺物の出土と、この遺跡に対する弥彦山・角田山の存在と、十三湊に対する十三の靄山を

燈台に例え、古い時代からこれを目印に北からも南からも物資の交流はあったにちがいないと述べる。

長く「上ノ国町勝山館」の発掘調査に携わる松崎氏は、北海道側からみた北方交易や安藤氏について報告する。この中で注目すべきは、コシヤマインの戦（一四五七）から和入地とアイヌ地の境界が定まる約百年間は、上ノ国蠣崎氏が和入社会の安定化をはかりながら台頭し、「蝦夷ヶ島代官」の地位を手中にして、本拠を松前に移した時期であったこと。蝦夷ヶ島に脱出していた下ノ国安藤氏が、湊安藤氏の援助を得て男鹿（小鹿島）に拠点を求めた時がコシヤマインの戦があった時で、その後能代・松山安藤氏へと成長していった等、安藤氏のこの時期の動向である。

パネルディスカッションでは、以上の報告・コメントをふまえて、テーマを①福島城、②十三湊、③安藤氏の三点にしぼって討論されている。①については、防衛性集落という性格をうんだ緊張関係とは、どういふものからの脅威なのかという点が大きな論点になったが、結論を得るところまではいかなかったように思える。論点の一つにもなったが、福島城の歴史的位置づけとして、时期的には古代の城柵から安倍氏・清原氏時代の〇〇柵あるいは平泉の館の中間に位置し、在地の中心的拠点であったという評価に落ち着きそうだが、それは古代国家との関係だけでなく、それ以外の世界との関係でも、在地がどのように関わっていたか検討してみる必要がある。そうした在地の動きは、発掘を積み重ねる中で考えることになろうが、その際福島城の持っている儀礼的空間のもつ意味の検討にも期待したいものである。

②については、復原プランをめぐって討論がなされた。これは港湾都市十三湊の中世都市としての構造や特色を明らかにすると同時に、その支配者であった安藤氏のあり方にも及ぶ大きな問題である。復原プランについては、現段階までの資料によるものとし、今後の発掘の成果を期待することになった。きれいに整備された「中軸街路」を中心とする計画都市だけで十三湊をとらえる問題点が指摘された。また十三湊は、様々な人間がいてその上に安藤氏がのっかっている都市であるが、重要なことは、この様々な人間を今後どのように見つけていくかということであるという発言もあった。

③については、水軍としての存在が常についてまわるが、その実態はどのようなものであったか検討してみる必要があると思われる。このためにも北方世界との関わり合いの問題も含めて、中世の十三湊をめぐる交易内容について、明らかにしてゆく事が大切であろう。

第三部

川添氏は、十三湊について中国・朝鮮からの貿易船が直接来航する国際貿易港であった可能性があるとしながらも、博多と同じレベルで論ずることは現状では慎重でありたいとする。その上で中世の十三湊を北方・日本海交易の整備されたターミナルと性格づけている。今後の検討課題として挙げられたものは示唆に富むものである。

長谷川氏は、近世十三湊の成立について、『津軽一統志』に加えて『松井由緒』・『竹内由緒』の新史料を紹介しつつ論ずる。またその特質については「十三小廻し」体制だったとし、一七世紀前半に成立した

という。付説では、いわゆる「興国元年の海嘯」について、新たに『前代歴譜』の文献にある「颶風」等の考証により、氏従来の大津波伝承否定の考え方を補強している。

大石氏は、湊の真ん中とも言える場所に安藤氏の館があることに注目する。十三湊の復原プラン通りとすれば、調査の成果は湊町の類型に一つの新しい型を加えるという。このような十三湊の構造的特色は、安藤氏が通常の農業を基盤としない領主であるということと深く関係するといふ。すなわち、安藤氏はもともと自らが海運や商業に携わる海民の首領ともいふべき性質であったものが、北条氏などに取り立てられて領主になったと考えられるもので、その意味からも安藤氏が十三湊に関わりをもつようになった時期は重要な意味をもつという。こうした海民的領主と湊町の関わり方の一例として塩釜津と佐藤氏の関係をあげる。

玉井氏は、「中軸街路」沿いの短冊形地割の実態と性格に触れ、整然たる地割から想定される「高い計画性」は、古代的ないし中世的な様相を残した都市空間をみられ、近世城下町の町割に見られるものと直接結び付けて考えない方がよいとする。

以上、評者の力の関係で単なる紹介に終わってしまったが、これとて報告者の意を伝えることが出来たかどうか、はなはだ疑問である。この点本書に関わった方々に深くお詫び申しあげたい。しかし、本書の内容を通して、当日のシンポジウムがいかにか白熱した、内容のあるものであったかということは、評者のいたらぬ紹介からでもおわかりいただけたことと思う。

十三湊の調査は、遺跡整備検討委員会も設けられ、現在も続けられ成果をあげていることは本書の「付記」にある通りである。シンポを通じて今後に残された課題は、小島氏が「あとがき」で総括している。その中には、本書では十分に触れられなかった、十三湊の繁栄がなぜ失われ「たか」という大きな課題も提示されている。

デイスカッションの司会を務められた石井氏は、その締めくくりにあたって、「十三湊の調査研究、あるいは保存整備という仕事は、常識的な日本歴史観の見直しである」（二二六頁）と述べているが、この言葉に今回のシンポ、同時に本書の持つ意義が余すところなく尽くされている。

（新人物往来社 四六判 一九九四年十二月刊 二七六頁 一三〇〇円）

（すずき・のぼる 秋田県立西目高校教諭）